

---

# 獄潰し ~下ネタのさじ加減は難しい~

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

獄潰し～下ネタのさじ加減は難しい～

### 【Zコード】

Z8445K

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

誰かに何かを伝えようと/orして、文を書く……しかし、時には失敗してしまって何を言っているのかわからなくなってしまうというその例え。

(前書き)

小説を書いている、読んでいる人全員が幸せになりますように。 雨  
月

獄潰し～下ネタのさじ加減は難しい～

賢治「たまに、そう、たまに下ネタで固めてくる人が中にはいると思つんだ。ぼくは本当にそれは危ないって言い切る自信があるわ」

時雨「え、何のこと……」

賢治「あからさまに下ネタってあれやあれをイメージするかもしれないけど、行き過ぎたエロい表現もはやどじょつもない下ネタだと思うんだよつ。うん、エロならば何でもいいといつ風潮が漂つていなくも無いからね」

時雨「一体全体いきなり何を言つてゐるの……」

賢治「もし、仮にぼくがおっぱこおっぱこおっぱこ……なんて叫んでいたらどうなるとおもうかな」

時雨「賢治の親友を僕はやめるよ」

賢治「そうだろうね。実に正しい判断だ。しらふでおっぱいとか叫んでいる奴は理由はどいつあれ、あまり近づきたいとは思えない。過度な性描写はどうかと思われるところはいいたいんだよつ。アップダウン、これが実に大切つ」

時雨「まあ、確かにそうかもしけないけど」

賢治「ラブコメ小説を描いていて過度な性描写は絶対に危険だよつ。あまり連続してそのようなネタでひっぱつていってはいづれ読者の感覚は麻痺されてもつと、もつと過激なものを……そんな状況にりかねない」

時雨「なるほど、一理あるかもしけないね」

賢治「そして、H口い表現と同じで下ネタも一発で大変なことになりかねない要素を含んでいるのさ。ふつ、思えばこの小説の歴史も

下ネタに穢れていた日々が長く続いたものさ」

時雨「物語が崩壊するようなことはいわないほうがいいんじゃないのかな……」

賢治「ここの中、誰もこの話で笑ってはくれない、笑ってはくれないけどそれはそれで問題はない。眞実を正しく伝えることがジャーナリストの仕事なら小説家の仕事は自分の思っていることを文にして、ついでに希望も載せて小説に託すことなのさ。たとえ、たとえそれが人の道を外れていようともね」

時雨「……」

賢治「衝動で描いてみたくなるって言うのもわかるのさ。しかし、文章能力がなければどんなにがんばったとしても小説の世界は変える事が出来ないのさ」

時雨「なんだかかなり無理やり話を湾曲させているよね。何を言いたいのかわからないよ」

賢治「たとえば……」

家に帰つつくと素つ裸の女の子が家にいた。

時雨「早速自分でどうしようもない馬鹿丸出しの文章をつかつているじゃないか、変態つ」

賢治「これは例さ。味も素つ氣も無いね……しかし、文とこつものすばらしさのでこれに付け足すだけで読み手にきちんと伝わる

ものなんだよつ

時雨「へえ、どんな感じになるのかな」

賢治「ふつ、期待しているなんてこのむつつづめ……」

家に帰りつくと、他の人には見えないのだが自分の脳内で作り出した素つ裸の女の子が家にいた。

時雨「すつごく危ない人だつ。この人妄想癖があるみたいだよつ  
賢治「そりやあ、そうだよ。さらに、これに文をつけて世界を広げ  
ていこうと思う」

時雨「……もっとましな文章の世界を広げようよ」

賢治「ふつ、そういう文句は今後の展開を予想してから言おつよ

家に帰りつくと、他の人には見えないのだが自分の脳内で作り出した素つ裸の女の子が家にいた。一人暮らしのはずなのに、僕の帰りを健気に待つてくれている。たまに、後ろから僕に抱きついてくるのだ……しかし、そんな彼女だが大家さんにはまだばれない。

時雨「ずつとばれないと思うよつ」

賢治「いないからばれないよ……いや、もしかしたら大家さんにも  
その少女が見えているのかかもしれないよ」

時雨「大家さんも妄想癖があるのつ」

賢治「……どうだらうね」

家に帰りつくと、他の人には見えないのだが自分の脳内で作り出した素っ裸の女の子が家にいた。一人暮らしのはずなのに、僕の帰りを健気に待つてくれている。たまに、僕の後ろから抱きついてくるのだ……しかし、大家さんにまだばれていないので一応、ほつとしている。

そして、僕はある日……大家さんにこういわれた。

「生靈がついてあるよ。女の子は君の事を常に後ろから睨んでいるね。いつ、君が昇天するのか、わしはひやひやしとる」

時雨「大家さんかなり凄い能力持つてるつ。え、しかもエッチな展開になるつて思つていたのに主人公命狙われてるみたいじゃん」

賢治「……じゃあ、次の文で最後だよ。さて、主人公の運命やいか

「」

家に帰りつくと、他の人には見えないのだが自分の脳内で作り出した素っ裸の女の子が家にいた。一人暮らしのはずなのに、僕の帰りを健気に待つてくれている。たまに、僕の後ろから抱き着いてくるのだ。その柔らかく、しなやかな身体の感触はたとえ、僕が服を着ていようともしっかりと伝わってくる。しかし、そんな事をしていたとしてもまだ大家さんにばれていないと思つてほつとしている。

そして、そんな平和な日常が続いていたはずのある日、僕は大家さんに呼び出された。

「……君、誰か女の子の友達でぞんざいに扱つたりしなかったのかね……凄く、君の事を睨んでる。このままでいいつ、君を背後から襲うのかわしは気が氣でならない……悪いことは言わないからそのこと話し合いなさい」

「貴方には関係のないことです」

それから数日後、不思議なおじいさんが大家を務めているアパートの一室で変死体が見つかった。天道時時雨、十七歳が藁人形を抱きしめて目を見開いていたのである。この事件は迷宮入りとなつた

……

時雨「ちょっと待つたあつ僕が死んでるだけど」

賢治「いや、実に難解な事件だったよ」

時雨「僕妄想癖なんてないしつ」

賢治「それこそちょっと待つた。本当に君に妄想する癖なんてないんだね」

時雨「ああ、ないよ」

賢治「じゃあ、前からやつてきたお姉さんがにこつて微笑んだらどう思うよ」

時雨「え、それは……まあ、嬉しいね」

賢治「はい、アウト。主観的な想像をしているね。そのお姉さんは脳内で格好いい男の人とあつた時は笑顔でいよじと練習していただけさ」

時雨「そのお姉さん自体が妄想してたのかよつ」

賢治「妄想しない人間なんていないさ。きっと、展開を予想できた人なんて零のはずだよ」

時雨「まあ、そうだよねえ。こんな予想できた人なんて一人もないはずだし」

賢治「で、ようやく本題に入ることが出来るんだけど……」

時雨「今からが本番なの……疲れたよ」

賢治「シリアスなシーンに下ネタをあえて絡めるといつ荒業が出来る人がこの世には存在すると思われる」

時雨「あくまで思われるだけなんだね……」

賢治「そうだよ、可能性はゼロじゃないから思われるはず。自分の目で見たものしかぼくは信じないのさ」

時雨「そうなんだ」

賢治「もはや自分で何を言つているのかわからなくなつてきた……だけど、最後にいえるのは『安易に下ネタ、口を使つてはいけない』というのが今回の教訓だよ」

時雨「……本当に何を言つているのかわからなくなつてきたね」

賢治「つまり、これまで一切エッチなネタがなかつた小説にふつと沸いたかのように出てくるちょっとエッチなシーンがドキッとする

といいたいんだよ」

時雨「それは賢治の嗜好なんじゃないのかな……」

賢治「ともかく、アップダウンは大切にしないといけないってこと

だ」

（続く…のか）

(後書き)

いいたいことが伝わらない、書きたいことをちゃんとかけない、これほどもどかしいことなんてないでしょ。ああ、神様……いるんだつたらこのおろかな私めに文章力という世界を統べることが出来る力を……なんて神様に祈つたところで不思議な能力がつくとは思えませんので失敗を重ねて地道に上を登つていきましょう。ああ、何でこんな小説を投稿してしまつたのだろう……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8445k/>

---

獄潰し～下ネタのさじ加減は難しい～

2010年10月9日02時54分発行